京都フィロムジカ管弦楽団　第38回定期演奏会

2015年12月27日（日）午後2時開演　京都府長岡京記念文化会館

曲目

リスト(ミュラー=ベルクハウス編曲)／『ハンガリー狂詩曲』第2番

Franz Liszt - Karl Müller=Berghaus : Ungarische Rhapsodie Nr.2

ウォルトン(バッハ原曲)／バレエ組曲『賢い乙女たち』

Sir William Walton : The Wise Virgins suite from the ballet after Johann Sebastian Bach

Ⅰ. What God hath done, is rightly done（神の御業は善いことである）

Ⅱ. Lord, hear my longing（主よ、我が切なる願いをお聞き下さい）

Ⅲ. See what His love can do（見よ、愛のなすところを）

Ⅳ. Ah! How ephemeral（ああ、なんとはかない！）

Ⅴ. Sheep may safely graze（羊は安らかに草を食み）

Ⅵ. Praise be to God（ありがたや、神を讃えよ）

―休憩―

ブラームス／交響曲第4番ホ短調　作品98

Johannes Brahms : Sinfonie Nr. 4 in e-moll op.98

Ⅰ. Allegro non troppo

Ⅱ. Andante moderato

Ⅲ. Allegro giocoso

Ⅳ. Allegro energico e passionato

指揮：木下 麻由加

京都芸術センター制作支援事業
楽譜協力：トヨタ・ミュージック・ライブラリー

お客様へのお願い

〜〜誰もがより楽しめる音楽会にするために、皆様のご協力をお願いいたします〜〜

- 携帯電話･アラーム付腕時計など音の出る機器をお持ちの場合は、電源を必ずお切りください。
- 演奏中の私語は固くお断りいたします。
- 客席での飲食、喫煙、写真撮影、許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
- 補聴器が異常音を発することがございます。ご使用の方はご注意願います。
- 演奏中の客席へのご入場は固くお断りいたします。
- 「せきエチケット」にご協力ください。せき、くしゃみがこらえられないときは、ハンカチやタオル等で口と鼻をおおうよう、お願いいたします。なお、演奏中の「のどあめ」の使用は、開封の音がかえって周囲のお客様のご迷惑になりますので、ご遠慮願います。
- 演奏者が音を出していなくても音楽が続いている場合がありますので、物音をお立てにならないよう、ご注意ください。

指揮者

木下 麻由加（きのした　まゆか）

2010年神戸大学発達科学部人間表現学科卒業。スカンジナビア・ニッポン・ササカワ財団より助成を受け、渡丁。2014年デンマーク王立音楽アカデミー指揮科修了。指揮を斉田好男、高谷光信、J・フッバーグ、N・スーカッチ（チェルニーゴフフィル音楽監督）、P・ラーセン、ピアノを木下千代、伴奏法をN・ゲーゼ、音楽理論をG・ラーセン、作曲法をA・ブロスゴード各氏に師事。また、斉田好男、牧村邦彦、井村誠貴各氏の下でオペラの研修を積む。神戸大学在学中よりオペラ団体『オペラ夢神戸』を立ち上げ、オペラ《ヘンゼルとグレーテル》、《魔笛》を上演。2012年・2013年ウクライナ国際指揮マスタークラス修了。修了演奏会にてチェルニーゴフフィルハーモニー交響楽団を指揮し、ロシア音楽奨励賞を受賞。現在、オペラ団体『オペラ夢神戸』指揮者、よろづ管弦楽団指揮者、その他複数のオーケストラ及びオペラ団体にて指揮及びトレーナー、アシスタントを務める。

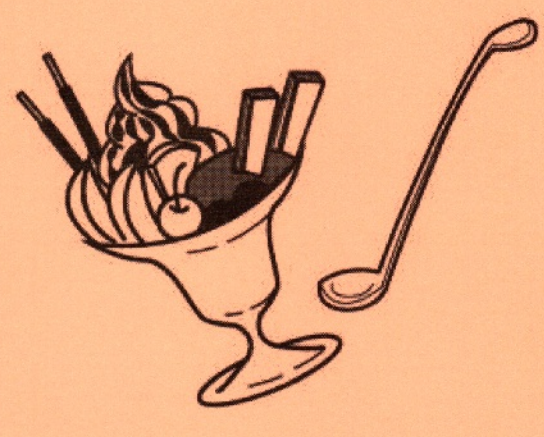
ロビーコンサート

午後1時15分より開催

ファイユノ／金管三重奏の為のディヴェルティスマンより

Tp.北山　Hr.北山　Pos.宮下

八木澤教司／パフェ・パラダイス！



第1楽章：フルーツ、with ウエハス　（ ^_^ ）
第2楽章：プリン、with ポッキー　(o^-^o)
第3楽章：あんみつ、with 白玉クリーム　（ 。・・。）
第4楽章：チョコ、with ブラウニー　(*'ー'*)

Fl.高松、御園生、間嶋

ベルワルド／グランドセプテットより第２楽章

Vn.佐々木　Br.中居　Vc.秦野　Kb.藤井　Kl.山本　Fg.大槻　Hr.渡辺

京都フィロムジカ管弦楽団「友の会」会員様ご芳名

松村　里香様	西坂　壽美子様	河内　尚和様	石川　美保子様	松田　英太様
杉本　幸子様	辻　良治様	森永　千一様	黒田　直樹様	石川　由紀子様
安藤　美知穂様	西　英子様	髙岡　拓也様	髙畑　雅至様	
鎗本　和弘様	岡　喜久彦様	和田　之宏様	種坂　勝様	
谷口　佳隆様	竹野　繁也様	玉山　茂夫様	土屋　健太郎様	

2002年４月に発足しました「友の会」は上記会員の皆様方よりご支援いただいております。（11月現在）

新規会員募集中です。詳しくは裏表紙をご覧ください。

曲目解説

遠藤　啓輔(トランペット)

リスト作曲（ミュラー=ベルクハウス編曲）／ハンガリー狂詩曲第２番

狂詩曲（ラプソディー）の原義は「叙事詩を歌うこと」にあるらしい。そして、ハンガリー生まれのリストは「ラプソディー」を、叙事詩のように自分の民族を称揚する芸術と考えていたようだ。もっとも、フィンランドにおける『カレワラ』のような叙事詩がハンガリーには（恐らく）無い。そこでリストがラプソディーの素材として着目したのが民族音楽であった。ヨーロッパ各地で活躍していたリストは、ハンガリーに帰郷した際にハンガリーゆかりの移動型民族であるロマの音楽を研究した。ハンガリー狂詩曲集はその成果を生かした作品で、リストの故郷への思いが形になっている。中でも第２番は特に人気のある作品だ。「チャールダーシュ」の形式で書かれているが、これは、前半のゆったりとした遅い音楽（ラッシュー、ラッサンなどと呼ばれる）から、後半の速い即興的な舞踏（フリッシュ、フリスカ、ツィフラーヤなどと呼ばれる）へと変化する舞曲の形式である。田舎の居酒屋で農民の娘たちが踊る様を思わせるこの舞曲は、ハンガリーの国民的舞踏とも言えるものだそうだ。

リストが作曲した原曲はピアノ独奏曲だが、今日はそれをカール・ミュラー=ベルクハウスが編曲した管弦楽版で演奏する。彼は音楽大辞典にも名前が出ていない。全音楽譜出版のスコアに書かれた大輪公壱の解説によると、ドイツでヴァイオリン奏者として活躍したのを皮切りに、指揮者、作曲家、編曲家、教育者として活躍した１９世紀の多才な音楽家であったらしい。注目されるのは、作曲家ヨアヒム・ラフと親しかったということ。我々フィロムジカは前回定期演奏会でラフの交響曲第２番を日本初演した。決して派手ではないが、オーケストラから無理なく豊かな響きを引き出し、各楽器の美しさを引き立てる、堅実で見事なオーケストレイションを覚えておられる方も多いと思う。ラフはリストの管弦楽作品のオーケストレイションを担当していたとも言われる。ミュラーが編曲したリストも、ラフのオーケストレイションと同様に見事なものだ。例えば曲の前半部、葬送行進曲風の序奏と暗い情熱を湛えたラッシューの音楽とが交互に配されるが、それらをクラリネットの即興的なソロによって接続する。このソロによる接続は合計３回出てくるが、並の編曲家なら「３回あるならフルートやオーボエにもソロを吹かせよう」と思ってしまう所だろう。しかしミュラーは、ソロの担当はクラリネットに敢えて限定し、不必要に色彩が派手になるのを避けている。あるいはフリッシュの始まり、花形楽器のオーボエがようやく主役に躍り出てソロを吹く。速い舞踏の動きは発音のはっきりしたオーボエでこそ引き立つ。前半でのオーボエの抑制的な扱いは、あるいはフリッシュでのオーボエ・ソロをより引き立てるための工夫か。最後は諧謔じみた豪快なテンポ変化の音楽を、打楽器やハープも総動員して盛大に盛り上げる。

ウォルトン編曲（バッハ原曲）／バレエ組曲『賢い乙女たち』

平野啓一郎の小説『マチネの終わりに』（毎日新聞朝刊連載中）に次のような珠玉の一節がある。舞台は今世紀初頭、爆発テロが日常化したバグダッドでの取材から帰還したジャーナリストの台詞である。「わたしは、実際に（中略）バッハの美に救われた人間よ。（中略）…今は絶望的な状況だけど、わたしはそのただ中で、初めて本当にバッハを好きになれた気がしたの。やっぱり、三十年戦争のあとの音楽なんだなって、すごく感じた。（中略）わたしはプロテスタントじゃないから、肝心なことはやっぱり理解できていないかもしれないけれど、ドイツ人の半分が死んだなんて言われているあの凄惨な戦争のあとで、教会に足を運んだ人たちは、やっぱり、バッハの音楽に深く慰められたんだと思う。」（連載第８２回・２０１５年5月２２日付）

やはり偉大な文人は歴史への洞察を怠らない。バッハの音楽の中から戦争に明け暮れる人類の歴史を読み取ったこの一節は見事な名文だ。ならば、このバッハの名旋律を選んで編曲した２０世紀の組曲『賢い乙女たち』に

も、戦争に明け暮れる人類の歴史が投影されているのだろうか？　されているのである！　バレエ『賢い乙女たち』は、イギリスのヴィック・ウェルズ・バレエ団（現在のロイヤル・バレエ団）の委嘱で書かれた。同団の振付師フレデリック・アシュトンが聖書からインスピレーションを得て立案、同団音楽監督のコンスタント・ランバートがカンタータなどバッハの有名な声楽作品の中から８曲ほど選び、ランバートの友人ウィリアム・ウォルトンがそれらのバッハの名旋律にオーケストレイションを施してできたバレエである。１９４０年の４月２４日に上演され、ウォルトンは同年にバレエの中の６曲を組曲としてまとめた。これが今日演奏する組曲である（各曲にはバッハの原曲の歌詞のタイトルがそのまま載せられている）。

この「１９４０年」はいかなる時代だろうか。前年には、ナチス・ドイツがポーランドに侵攻し第２次世界大戦が勃発、ウォルトンの故国イギリスはフランスとともにドイツに宣戦布告し、独仏国境で長期間のにらみ合いを始める。そして１９４０年に入ると、ドイツはヨーロッパ各地への侵攻を強化。イギリスでは宥和政策を取ってきたチェンバレン内閣が行き詰まって５月に総辞職（後継首相はチャーチル）。そして翌年には日米開戦となる。このような時期に書かれた音楽に戦争が反映していないはずがない。戦争の行方に対して不安を抱える人々が、バッハの音楽に救いを求めたことは充分に考えられることだ。

それでは、バレエの内容にはどのように戦争の影響が反映しているのだろうか。タイトルの『賢い乙女たち』は、新約聖書「マタイによる福音書」の一節に由来する。自ら予言した死の数日前、イエスは弟子たちに、「『最後の審判』は思いがけない時に下されるので常日頃から備えを怠ってはならない」と戒め、様々なたとえ話をする。そのたとえ話のひとつが「賢い乙女と愚かな乙女」の話である。

…１０人の乙女が灯火を手に花婿を迎えようとしていたが、愚かな５人の乙女が灯火だけを持っていたのに対し、賢い５人の乙女は灯火とともに燃料の油も持っていた。花婿は予想外の時間に到着したので、愚かな乙女たちの灯火は燃え尽きてしまっていたが、賢い乙女たちは油を足して火を灯し続けた。愚かな乙女たちは賢い乙女たちに「油を分けて下さい」と頼むが、賢い乙女たちは「店へ行って油を買ってきなさい」とにべもない。賢い乙女たちは婚宴の部屋（ここでは天国のことを示している）に入ったが、愚かな乙女たちが油を買いに行っている間に部屋の扉は閉じられ、愚かな乙女たちは部屋（天国）に入ることができなかった（＝地獄に堕ちた）。…

賢い乙女の無慈悲な態度や、賢いか愚かかの二元論的発想が嫌で、僕はこの話が好きになれない。しかしながら、我々が生きている民主主義社会は市民一人一人が賢くなければならない、ということに思い致すと、現代的な重要性を持った話だとも思われてくる。第２次世界大戦が進行していた１９４０年という時代を考えれば、市民は賢く判断できているのか、という問いかけの意味があったのかもしれない。そして残念ながら、人類は賢くなかった！　それでは、この作品を今聴くことにどのような現代的意味があるのだろうか？　フランシスコ・ローマ法王が言う如く、第３次世界大戦は既に始まっていると思う。この作品が書かれた時代と、悲しいかな、見事に一致してしまっている。今度こそ人類は賢く判断できるのか、と音楽に問いかけられているような気がする。

編曲者のウォルトン（1902－1983）は、関西人にはなじみ深い作曲家だろう。というのも、関西は何故かウォルトンの名演奏に恵まれているからだ。人気曲・交響曲第１番は大阪４大プロや京響がいずれも演奏しているほか、声楽付きの大曲『ベルシャザールの饗宴』や愛すべき組曲『ファサード』までも演奏されているのだ。もちろん『賢い乙女たち』も演奏されている（２０１０年、児玉宏指揮大阪交響楽団）。そして、ウォルトン作品、とりわけ交響曲や『ベルシャザールの饗宴』などを聴いて衝撃を受けた人には、ウォルトンとバッハの取り合わせは奇異に思われるのではないだろうか？　ウォルトンの作風は扇情的で攻撃的。原色的な色彩が目を剥き、これでもかというほどのリズムの繰り返しに圧倒され、およそバッハの落ち着きとは相容れないように感じられる。実際、ウォルトンの作曲家人生も破天荒なものだ。大学は中退し、作曲はほぼ独学、ジャズにも没頭する。定職に就かず、青年時代は映画音楽などの作曲で糊口をしのいだほかは、友人たちからの援助に頼った。急進的な作

風とも相まって彼は「問題児」ととらえられていた。そして20歳代の終わり、1931年に破格の演奏効果を誇るオーケストラ伴奏つき合唱曲『ベルシャザールの饗宴』を発表し、保守的なイギリスの合唱音楽界に殴り込みをかけ、1935年にはついに彼の特徴が濃縮された交響曲第1番を完成させる。こんなウォルトンではあるが、実は音楽のルーツは聖歌にある。聖歌隊指導者の息子で美声の持ち主だったウォルトンは少年時代に聖歌隊員として活躍しており、宗教音楽は血肉となっていたのだろう。『賢い乙女たち』は彼にとって自分のルーツに立ち返る仕事だったのではないだろうか。木管2管編成のシンプルなオーケストレイションの中で、イングリッシュホルンが異彩を放つ。バッハは受難曲においてオーボエ・ダ・カッチャに悲しみの感情を表現させていたが、ウォルトンはオーボエ・ダ・カッチャの音色を継承する楽器としてイングリッシュホルンを使用したのだろう。ウォルトンのバッハへの理解の深さがうかがえる。

組曲は6曲で構成される。第1曲・第4曲・第6曲はラッパも加えた壮麗な曲で、その間に室内楽的で静かな曲が配されている、と考えると把握しやすい。**第1曲**は、木管や弦の軽快な動きに金管の伸びやかなコラールが重なり、明朗にオープニングを告げる。**第2曲**と**第3曲**は静謐な音楽だが、第2曲が悲しみを湛えているのに対し、第3曲は安息に満ちている。**第4曲**は第1曲と同様、軽快な動きとコラールの組み合わせだが、第1曲とは対照的に、表情は厳しく、怒りに満ちている。**第5曲**はこの作品の白眉で、ヴァイオリン・ソロとハープが聴き手を別世界にいざなう。**第6曲**はトランペットを主体としたファンファーレ。しかしこの祝福されたような音楽が鳴り響いた初演の後、人類が未曾有の戦争へとはまり込んでいった歴史を忘れてはならない。

ブラームス／交響曲第4番ホ短調

ブラームス最後の交響曲、と言っても円熟期52歳の作。死までの12年間、ブラームスは新しい交響曲を書かなかった。僕の邪推だが、頭の良いブラームスは、本当に書きたい音楽と、名声を確立するために書かざるを得ない音楽を巧妙に作曲し分けていたように思う。僕にとってのブラームスは、官能的な旋律を濃厚に歌い上げるメロディーメーカーで、そうした彼の良さが最も表出した作品は3曲のヴァイオリン・ソナタだと思う。それに対して交響曲は、ブラームスにとっては名声を確立するための手段だったのではないかと感じる。交響曲4曲でベートーベンの後継者としての地位を確立できたブラームスにとって、老境に至ってまで交響曲を作曲する必要は無かったのだろう。晩年のブラームスは、ヴァイオリン・ソナタ2番・3番をはじめ、メロディーメーカーとしての本領を発揮できる室内楽作品ばかり作曲した。このように、ブラームスにとって交響曲は処世術であったと思っているが、しかしながら、いや、だからこそ、比類の無い魅力がある。ベートーベンの後継者とされるためには、ベートーベンの交響曲に見られる無駄を削ぎ落とした緊張感ある形式美を踏襲する必要がある。そこでブラームスは、メロディーメーカーとしての本質や「進歩主義者」としての本性を封印し、あえて自らに制約を課して古典的な交響曲を書いたのであろう。しかしながら、そうした厳格な形式美の端々から官能的なメロディーや斬新さが漏れ出てくる。こうした相克が、ブラームスの交響曲、とりわけ、第4番の魅力だと思う。

第1楽章はソナタ形式のアレグロ。古典的定石に則っているように見えながらも、端々に斬新さが見え隠れする。まず冒頭、序奏も無しに、いきなり第1主題から始まる。それだけでもかなり面食らうが、その第1主題が、ごくごく短い音の断片を連続させたような、およそメロディーとは思われないような主題なのだ。第2主題も、歌謡性を排してリズムの厳しさを前面に出したもので、主要主題のいずれもがブラームス本来の旋律美を封印したものである。その分、副旋律に雄渾なブラームス節が聴かれ、かえって主題以上に強い印象を与える。

また、リピート記号が無い、ということも重要な新機軸だと思う。楽譜通りリピートする演奏の方が希少な現状においては見過ごされがちだが、リピート記号がある1・2・3番とは違う何かが4番にはある筈だ。僕の印象としては、1・2・3番の第1楽章は大河的な広がりを持っており、リピートによる繰り返しによってその広がり

をさらに増強できる音楽だと言える。それに対して４番は、楽章終盤に向けて熱量を増していく盛り上がりにこそ魅力があり、仮にリピートをすると、その推進力に水を差す恐れがある。これが４番に限ってリピートを廃した理由ではなかろうか。リピートする演奏が大好きな僕としては、音楽の本質に迫る重大な問題だ。

第２楽章は程好い推進力を持ったアンダンテ。第１主題は、僧院で聴く聖歌のように峻厳な管楽器の吹奏で始まり、弦楽器のピッツィカートが寡黙にそれを引き継ぐ。対照的に第２主題は、チェロによる濃厚な歌となる。この第２主題は「シ－ド♯－レ♯－ミ－レ♯－ド♯－シ～」と始まるが、これは移調すると「ド－レ－ミ－ファ－ミ－レ－ド～」になる。つまり長調の音階を上がったり下がったりするだけだ。しかも、リズムは８分音符の単純な連続。それなのにこの主題は情熱を伴って胸に迫ってくるのである。おそらくチェロという楽器の特性とこの旋律の相性が抜群なのであろう。ブラームスが並みのメロディーメーカーと違うのは、その楽器の良さが最も効果的に発揮される旋律を書ける所にあったと思う。この第２主題は、封印したはずのメロディーメーカーとしてのブラームスの本質が最も強く滲み出た、幸福な瞬間だ。

第３楽章はスケルツォに相当する。交響曲にスケルツォを挿入するのはベートーベン以来の定石だが、ブラームスにとっては大いなる挑戦だったろう。１・２・３番にはスケルツォと言える楽章が無いからだ。メロディーメーカーのブラームスにとって、リズムが肝要となるスケルツォは相容れなかったのだろうか。「スケルツォ」は「諧謔曲（ふざけた音楽）」という意味だが、ここでブラームスは羽目を外してふざける。ブラームスとしては異例なことに、音の派手なトライアングルとピッコロを使用しているのだ。これによって、まるでおもちゃ箱をひっくり返したかのような喧騒に満ちた音楽を書くことに成功した。

短い中間部は田園情緒あふれる音楽になる。なお、この中間部は「poco meno presto」というわかりにくいテンポが指定さている。ほとんどの演奏はこれを「速さを少し減じて」と解釈して、アレグロの主部よりも遅いテンポで伸びやかに表現する（もちろん、今日の演奏もそのようになされる）。ただ、このテンポ指定を「それほどでもないプレスト（つまり、主部のアレグロよりは速い）」と解釈することは不可能だろうか？　この中間部を速いテンポで演奏すると、田園情緒に躍動感が加わって、農民の陽気なダンスのような楽しい音楽になると思う。豪放で野太いスケルツォ主部と、中間部の軽快な舞曲、という、面白い対比になると思うのだが…

第４楽章はバロック的な変奏曲の傑作。冒頭で８小節からなる主題を演奏すると、これを少しずつ変化させた、やはり８小節からなる音楽を延々と継いでいく。４分の３拍子で始まるが、中心に２分の３拍子の音楽が挿入され、必然的にテンポが倍遅くなる。この遅い音楽から４分の３拍子の音楽に再帰する際は、楽章冒頭の音楽が再現される。全体としてソナタ形式を彷彿とさせる３部構成であり、交響曲の終楽章として違和感が無い。

冒頭主題は簡潔なものだが、情熱的な中にも悲壮感を漂わせている。この主題はバッハを範としていると言われるが、僕は特に後半４小節が、ベートーベン『エロイカ』終楽章のフーガ主題の変形ではないかと思っている。

テンポが遅くなる中間部はこの曲の白眉。まずフルートが長大なソロを悲しげに演奏するが、これはあらゆるフルートのための音楽の中でも最も感動的な音楽だろう。この悲嘆の声に答えて神が降りてくるかのように、管楽器が下降音型を奏する。そして、この楽章から初めて用いられるトロンボーンが、神の声のように荘重なコラールを演奏する。なお、指揮者の金聖響はこのコラールについて、敵対していたはずのリヒャルト・ヴァーグナーの『タンホイザー』の引用、という重要な指摘をしている（朝日放送のテレビ番組にて）。１９世紀の独墺音楽界は、総合芸術たる楽劇を確立したヴァーグナーが圧倒的影響力を持っていた一方、音楽哲学者のハンスリックはヴァーグナーの音楽を「音によるアヘン」と決めつけて攻撃した。そして、ブラームスはハンスリックにとっての模範的作曲家として祭り上げられていた。頭の良いブラームスは、自分を高く買ってくれるハンスリックを利用しつつも、不毛な対立を内心毛嫌いしていたのではないか、ということが、この引用から想像される。

再現部を経て、コーダはテンポを速め、ブラームスらしい暗い情熱の中で締めくくられる。

京都フィロムジカ管弦楽団
Philomusica Orchester Kyoto

Konzertmeisterinen

馬渕　清香※
(Walton,Brahms)

八木　愉希絵
(Liszt)

Violine

小幡　拓也
藤井　まきは
森　亜紀
八木　愉希絵
安江　絵美子
渡辺　達之輔
青木　麻須美・
加藤　百菜・
後藤　周・
近藤　直彦・
佐々木　啓佑・
佐々木　萌子・
須田　謙史・
銭廣　承平・
高谷　祐介・
田中　真穂・
谷内　優子・
中島　幸・
安原　由克子・
好村　塁・
渡邉　隆寿・
内田　佳子※
福澤　敬子※
馬渕　清香※

Bratsche

中居　楓子
渡邊　泰里
上田　秀樹・
鵜飼　大介・
河井　奈美・
近藤　均・
塚腰　理恵・
古田　直道・
前川　信幸・
前川　和響・
吉川　昌毅・

Violoncello

多田 進
秦野　貴生
松浦　悟子
松浦　由香
Cecille de Laurentis
奥田　悠・
奥村　友梨香・
岡野　正義・
高村　誠・
西山　峻司・

Kontrabaß

亀谷　友紀
茂原　尚樹
田中　明江
田中　郁太郎
藤井　輝之
寺村　有史・
丸山　拓史・
後藤　志帆※

Harfe

橋本　和恵※

Flöte

高松　香陽子
鳥山　梓
間嶋　美波
御園生　香
山口　佳美

Oboe

木津　怜美
大王　恵里子
板井　聖菜・
(Englischhorn)

Klarinette

関　英子
山本　拓
髙林　りり子・

Fagott

石塚　有里子
大槻　萌絵

Kontrafagott

近藤　紀宏※

Horn

加藤　実可子
北山　絵里
中澤　美帆
福山　百音
干場　信孝
山影　つぐみ
渡辺　悠

Trompete

遠藤　啓輔
北山　武志

Posaune

中村　三鈴
宮下　秀行

Bassposaune

藤井　舞

Pauken

籾井　渉※

Slagzeug

笠井　智香※
笠井　彰吾※
国重　沙知※
白数　由紀子※

・：団友
※：客演奏者

団長

多田 進

事務

西村　浩

弦トレーナー・客演コンサートミストレス

馬渕　清香　大阪府出身。桐朋学園大学卒業。小国英樹、原田幸一郎、工藤千博、森悠子、田辺良子、岩崎淑、R.ブレンゴラの各氏に師事。1990年全日本学生音楽コンクール第1位をはじめ、イタリア・シエナのギジアーナ音楽祭ギジアーナ・ディプロマ賞受賞、コンセールヴィヴァン・オーディション最優秀賞受賞、イタリア・グッビオ国際Duoコンクール入選、東京国際芸術協会レ・スプレンデル音楽コンクール室内楽部門入賞など、国内外で多数の受賞歴がある。ソロ・リサイタルの開催のほか、オーケストラ、室内楽でも活躍。「DUO MOON STONES」「四次元三重奏団」メンバー。

弦トレーナー

岩井　英樹　名古屋芸術大学卒業。ヴィオラを西岡正臣、ウルリッヒ・コッホ、ジークフリート・ヒュアリンガーの各氏に師事。1997年より大阪フィルハーモニー交響楽団ヴィオラ奏者。

管トレーナー

山崎　雅夫　京都大学卒業。現在、京都大学交響楽団金管トレーナー。トランペットをC.マクベス、A.ハーゼス、M.アンドレの各氏に師事。

京都フィロムジカ管弦楽団からのお知らせ

第39回定期演奏会

2016年6月26日(日)　八幡市文化センター　指揮：山本貴嗣

諸井三郎／子供のための小交響曲
シベリウス／ヴァイオリン協奏曲（独奏：馬渕清香）
プゾーニ／交響組曲

新入団員随時募集中

～私たちと一緒に演奏しませんか？ まずはお気軽に見学にお越しください。 団員一同、お待ちしております。～

私たち京都フィロムジカ管弦楽団は、近畿のみならず全国各地に在住する団員が週に一度京都に集まり、力を合わせて活動しています。定期演奏会だけでなく、アンサンブルなども楽しんでいます。「一緒に演奏したい！」という皆様のご参加をお待ちしています。

＜募集パート＞

ヴァイオリン・ヴィオラ・チェロ・コントラバス　（弦楽器急募！　！）
オーボエ・クラリネット・トランペット・トロンボーン／打楽器（※打楽器は諸条件について要相談）

〔入団資格〕練習に出席できること。年齢制限はありません。学生の参加も歓迎します。
〔練習日時〕毎週日曜日（午後1時～午後5時）　春と秋に練習合宿（大津市内。合宿費は10,000円程度）
〔練習場所〕京都芸術センターなど京都市内各所のほか、大津市など
〔諸 費 用〕活動費：3,000円/月　演奏会参加費：20,000～30,000円（学生・初参加の方には割引あり）

入団・見学に関するお問い合わせ先　E-mail：recruit@kyotophilo.com

「友の会」会員随時募集中

フィロムジカの活動を応援してくださる方を募集しています

【年会費】　1口　1,000円
【期　間】　ご入会いただいた月より1年間
【特　典】　1．期間内の定期演奏会に、1口につき1名様を無料ご招待
2．その他演奏活動のご案内
3．定期演奏会プログラムへのご芳名の掲載

お申込み・入会に関するお問合せ　Tel&Fax 075-605-0123（西村）　E-mail：tomo@kyotophilo.com

京都フィロムジカ管弦楽団ホームページ

http://www.kyotophilo.com/

過去の演奏曲も紹介しております。是非一度ご覧ください。